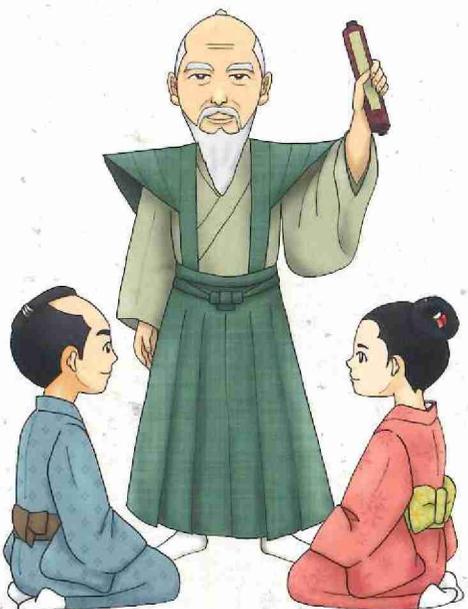


鍋島夏雲日記

『鍋島夏雲日記』は幕末佐賀藩の重臣であった鍋島市佑(号は夏雲)の日記で、これこそ幕末佐賀藩のトップシークレットが満載された超重要文書なのだ。およそ一五〇年のときを超え、上峰町の「明治維新一五〇年記念さが維新関連事業」として、一挙活字化して出版されたのじゃ!!

江戸時代のちよつとむずかしい文章だが、幕末日本の研究をする人たちにとつては垂涎(すいぜん)。(よだれが垂れるほど)の情報だ。



鍋島夏雲とは何者か?

鍋島夏雲はもともと鍋島市佑保脩と名乗っておった。納富鍋島家の当主だ。納富家はむかしから「鍋島」の姓を名乗ることを許された名門。夏雲という名は隠居したあとの号だ。

享和2年(1802)9月22日に生まれ、若いころはいろいろな苦勞があったが、だんだん頭角をあらわしていったのだ。天保2年(1832)には「殿様御年寄」という職務を命じられ、佐賀藩十代藩主・鍋島直正の側近筆頭として三十年にわたり仕えたのじゃ。だから殿様や佐賀藩の内情についてはだれよりも知っておる。その日記には他には書かれていない佐賀藩の記録が満載じゃ。

日記は、あとで書き加えたり、丸ごと書き直したり、鍋島夏雲という人が記録に対して強い執着をもっていったことが感じられる。政務に関わる者としての責任感がひしひしと伝わってくる。



鍋島夏雲と上峰町の縁

鍋島夏雲の家である納富鍋島家の領地は代々現在の上峰町下津毛地区。『鍋島夏雲日記』には「下津毛」の地名が出てくる。そこでは米に虫がつく病気や水害を気にかける様子がうかがえる。上峰町が日記の出版を企画したのは、納富鍋島家との縁によるのだ。

16歳の若き藩主の言葉じゃ いかにもすごい殿様かこれだけでもわかるじやろう

藩主は民を治める責任を天からあたえられているのだから、心のかぎりをつくし天下国家を治めるのが任務である。それなのに、私のような才の乏しい者が藩主を継ぐなどということは本当におそれ多いことだ。だから、いつしようにけんめい力をつくして佐賀藩を立てなおしたいのだ。藩主として佐賀に入ってから1年ほどたつが、まだその手がかりさえつかんでいない。そのうえ近年は凶作にみまわれ、民たちはとても苦しんでいる。むかしから民は国の大もとと言われてきたように、民がいなければ国は一日たりとも成り立たない。だから、さまざまな経費がかかるさなかではあるが、自分の身のまわりから儉約をはじめ、災害や戦によって身よりのない孤独な人が出ることがないように全力で備えたい。——天保2年16歳の鍋島直正のことば(訳)(鍋島夏雲内密手控)——

嘉永6年(一八五三) 6月15日の日記。ペリー来航の報告。江戸から11日で報告が到着している。当時としてはかなりはやい。よほど急いだのだろう。殿様からはすぐに夏雲へ伝えられた。このあとには、さらに長崎に回されてペリーがやってきた場合の対策が指示されている。佐賀藩はペリー来航に向けて準備をしており、すでに長崎の要所に鉄製大砲を備え終えていた。おどろくほど冷静に、そして速やかに対処していることがわかる。



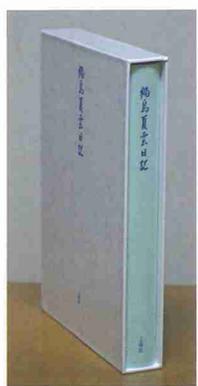
鍋島夏雲日記

伊藤昭弘監修

上峰町発行

A5判変型/432頁/上製・貼函入

非売品 佐賀県内図書館で御覧ください



夕方学館(藩校弘道館へ)罷
 出居候処(出勤していたところ)、急成(急ぎの)御用の段(殿様からの呼び出しがあったと)申来候故(伝えてきたので)
 則(すぐに)罷出候処(出向いたところ)、去四日江戸よりの早
 打(急ぎの連絡)到着。同三日浦賀の方え
 異国船四艘(内軍船二艘、蒸気船二艘)入津(港に入ってきた)。
 アメリカの由(アメリカの船ということ)。右の外沖目(沖のほう)にも二
 艘相見居候由(見えていたということ)。

夕方学館(藩校弘道館へ)罷
 出居候処(出勤していたところ)、急成(急ぎの)御用の段(殿様からの呼び出しがあったと)申来候故(伝えてきたので)
 則(すぐに)罷出候処(出向いたところ)、去四日江戸よりの早
 打(急ぎの連絡)到着。同三日浦賀の方え
 異国船四艘(内軍船二艘、蒸気船二艘)入津(港に入ってきた)。
 アメリカの由(アメリカの船ということ)。右の外沖目(沖のほう)にも二
 艘相見居候由(見えていたということ)。



古文書解読いろは

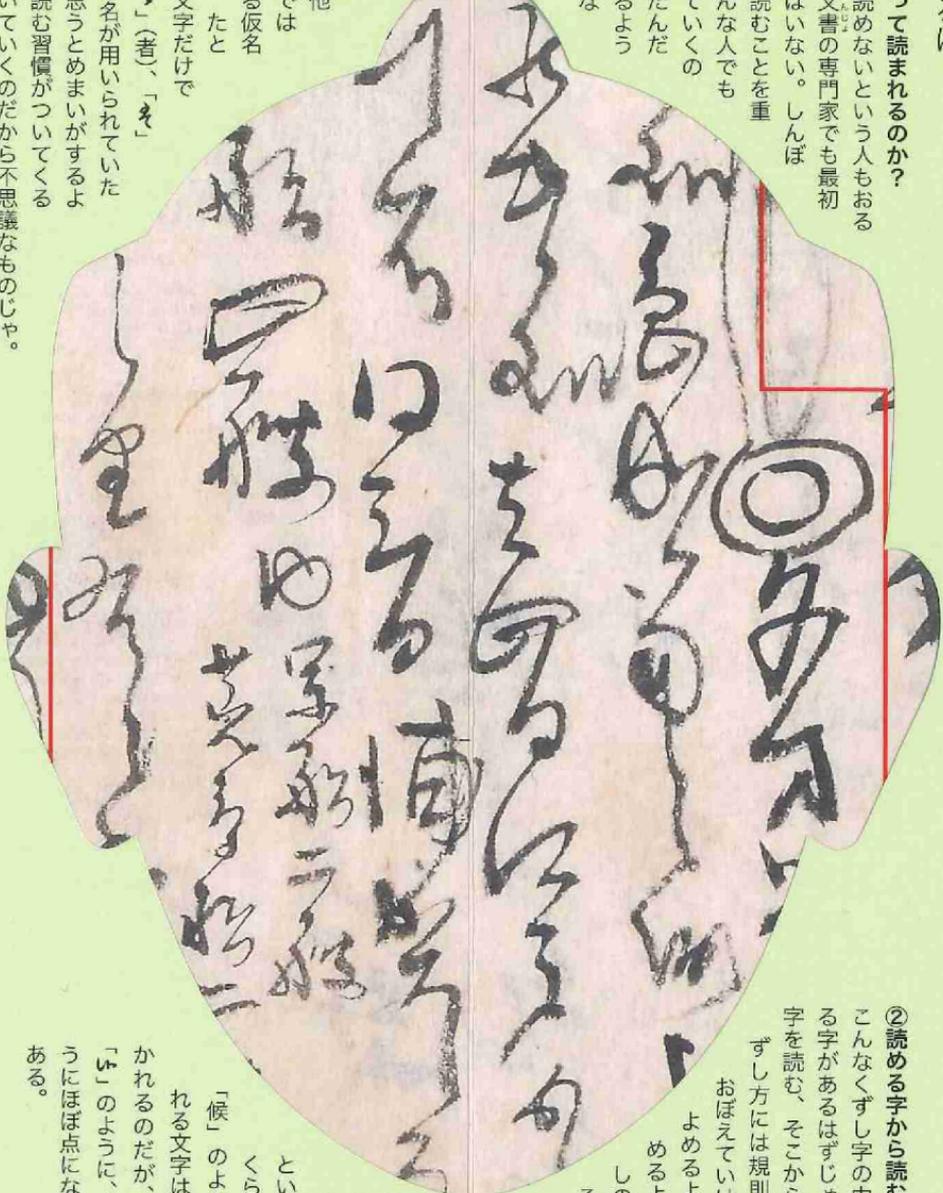
①古文書はどうやって読まれるのか？

わあ、こんな読めないという人もおるかもしれないが、古文書の専門家でも最初から読めた人などはいない。しんぼうよく少しずつ読むことを重ねているうちにどんな人でも読めるようになっていくのじゃ。赤ちゃんがだんだん言葉をしやべれるようになっていくようなものじゃ。

③変体仮名

現在の人々が使用している平仮名の他に、ちよっと昔までは変体仮名とよばれる仮名も用いていたのだ。たとえば「は」と読む文字だけでも「は(波)」、「ま(者)」、「ま(盤)」など複数の仮名が用いられていたのだ。覚えようと思つとめまいがするよ

うだが、古文書を読む習慣がついてくるとだんだん身につけていくのだから不思議なものじゃ。



②読める字から読む

ことなくずし字の中にもきつと読める字があるはずじゃ。まずは読める字を読む、そこからがはじまり。くずし方には規則がある。それをおぼえていけば大半の文字がよめるようになるぞ。読めるようになるぞ。むかしの人と会話しているような楽しさに出会えるぞ。

④候文

手紙の文章は、しばしば「……候」ということばでしめくられる。

「候」のように頻繁に用いられる文字は「候」のように書かれるのだが、より省略されて「ち」のように、さらに「へ」のようにほぼ点になってしまうこともある。

ペリーがイライラしている
40日以上も滞在しているし、このままなんの決着もなければ、ペリーも本国へ帰っても面目がないだろう。少人数でも一戦交えて島のひとつでも乗っ取って帰国の土産にしたいといっているそうだ。

(安政元年5月13日)



西郷隆盛らが上京
熊本藩士からの情報で、薩摩藩の島津久光が大兵を率いて上京していることが伝わる。西郷隆盛の名前も出てくるぞ。

(文久2年3月5日)

島義勇、副島種臣、江藤新平、みんな情報を集めているぞ
当時はまだ若かった七賢人たちも登場する。彼らはいろいろな方面からの情報を藩に報告している。文久2年3月5日の日記には島義勇が熊本藩士から、文久4年4月21日には江藤新平が小城から副島種臣を通じて、極秘情報を伝えているぞ。

勝海舟が佐賀藩と幕府の仲介
観光丸の返上について勝海舟が請け負うとの意向が記される。

(文久4年4月7日)



鍋島夏雲日記を読むと、鍋島直正や夏雲がタイムリーに情報を集めていることがわかる。それは佐賀藩のみにとどまらず、幕府中枢、朝廷、有力大名の動向から尊王活動、海外情報など多岐にわたる。佐賀藩は藩内外のさまざまな動きに即応すべくアンテナを張りめぐらしていたのだった。

ジョン万次郎の処遇

土佐のジョン万次郎が江川太郎左衛門の配下となったことが記されている。ジョン万次郎は漁船で遭難しアメリカの船に救助された。それからアメリカへ渡ったため貴重な情報源であった。

(安政元年1月5日)



一橋慶喜(のちの将軍徳川慶喜)が将軍に慶喜について、長州の動きを見すかしていて、英物(優れた人物)だと述べている。
(文久4年12月9日)
慶応2年12月5日に征夷大將軍になった慶喜だが、その3年前の『鍋島夏雲日記』文久3年11月27日には、水戸藩主(慶喜の実兄)が「弟は天下を取る」と思っていることが記されている。

島津斉彬と鍋島直正が面談

島津斉彬から自筆の手紙が来て、ある場所で落ち合いたいとの意向だが、親しく話し合うには仰々しくしてはいけないので、お茶とタバコくらいの準備でいいのではないかと話し合った。

(天保5年1月20日)



枝吉神陽が藩へ進言

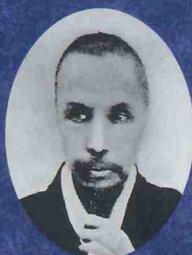
藩の歴史に通じていた枝吉神陽は藩政府へ、鍋島家が尊崇する神社がかかげる旗の紋について、杏葉紋のほかに足紋の使用を進言した。

(文久元年12月12日)

吉田松陰が捕らえられた

佐久間象山の門人の長州浪人吉田松陰がひそかにアメリカ船に乗り込んだが発覚した。命は助からないだろう。

(安政元年5月7日)



佐久間象山が殺された
文久4年(元治元年)7月11日らしいが、佐久間象山が殺害されたという。一橋慶喜(のちの徳川慶喜)に仕えて、開国貿易の論などを建言した経歴も記される。

(文久4年8月1日)